

社会生活と歌唱

八 木 真 平

我々の生活は自分一人の生活である個人生活と、他の人々と共に暮していく社会人としての社会生活を考えることが出来る。この個人生活においても、又社会生活においても、そこに必らず結びついた歌唱の生活が一体不離の形でくっついている。幼児が一人で陽当りのよいお縁側で、おもちゃを相手に盛んにしゃべったり、歌ったりしている姿と同じように、我々成人の生活にも、一人仕事をしながら歌いつゝ楽しそうに働いている有様等はよく見受ける情景であるが、こういう個人の生活に伴った歌唱の生活が前者で、後者の社会生活、即ち団体の生活においても歌う生活がくっついていて、これが団体を構成する人々の相互の意志疎通の上に役立ち、団結を強くし、時には全体の志気を高め、勇気を振り起させることさえある。

この団体生活で用いられる諸種の歌を分けて見ると、三つの場合が考えられる。

その一つは社会生活を営む団体の精神を表わすもので、この歌を合唱することによって各員の意志をつなぎ、その団体の中に生活することを楽しみとし幸福と感ずるような、所謂その社会の精神的象徴となるものである。

例えば各国のもっている国歌の如きもので、国家という大社会の風格を表現するものである。その外、会社の社歌であるとか、学校の校歌であるとかいったもので、これを合唱することによって民族意識を強め、或は属する社会の認識を強めるようなものである。これが各独特な性格と方向を示すことになる。遠く異郷にある時、日の丸の国旗を仰ぎ、「君が代」を歌うことによって涙する感激も、こゝに原因するものといえよう。

次に団体の志気を高めるために用いる歌曲であるとか、或は「狩人の合唱」であるとかいうものがこれである。立派な統制のもとに、人々が心を一つにして、湧き上るような熱烈な応援歌を合唱することで、場内の空気を高潮させ、その結

果選手が異常な奮闘をして頽勢を挽回、遂に優勝するに至った等という劇的な場面は、よく繰りひろげられる事実である。

以上の外にもう一つの場合は、合唱することによって、一つの想像もつかないような大きなまとまった力が現われたり、或は歌を合せることによって仕事の能率を高めることがある場合で、例えば建築のときにやる「石つき歌」であるとか、「あみ（漁網）引き歌」のようなもので歌いながら仕事をして各自の力の総合力を發揮し、又は各個々にやるよりも疲労を減じるといった工合のものである。一体に時間的に動作を伴う作業ではすべてこうした歌唱と結びついているものである。

かくの如く我々の日常生活に附随した歌の生活を考えて見ると、如何に音楽が人生の生活に密接で、又広範囲に影響するものであるかがわかるわけである。

本論叢第一号において、学生歌を作つてこれを合唱させることで、合唱による音楽美を味わいたいという希望を述べたが、本号で更に新らしく「学生歌その二」を作曲發表して学生の学校生活をうるおし、又相互の意志疎通の役に立たせたいと念願している。

学 生 歌 (その二)

山 本 耀 子 作 詞

(一) 白珠のうちなる光

まなべよと

我等の師は教へたまへり

(二) 朝露を含める菊の花

そのなかに

我は見ぬ清き心のあり方を

(三) ときは木の茂れる山の

嶺々に

こだまする我等の高き歌声

(四) この道を歩まむ誠もて

誇もて歩まむ

輝けるはてなき甲南の道を

甲南女子短期大学 学 生 歌

(その二)

学生 山本 耀子 作詞
教授 八木 眞平 作曲

Dolce ♩=72

mp

mp

1. しらたまの うちなる ひかりまな べよと
2. ときはぎの しげれる やまのみね みねに

われらの 一 しはおしえた一ま一え り
こたます る われらの たかきうたご え

mf

あさつゆをふくめるきくのは—な　そのなかに
このみちをあゆまむまことも—て　ほこりもて

mf

われはみぬぎよきこころの—ありかた—を
あゆ—まむかかやけるはてなき　甲南のみ—ち—を

poco rit.

poco rit.